

# 城西大学経営学部開設 10 年を振り返って

経営学部教授 草野素雄

光陰矢のごとし。早いもので 2004 年 4 月に城西大学経営学部が開設されて 10 年の歳月が流れた。経営学部は、経済学部経営学科を基礎に新たな科目を加えて、研究分野別ではなく将来の進路に合わせた 3 つの履修モデルコース（企業マネジメント、環境マネジメント、行政マネジメント）を設けてスタートすることになった。振り返ってみると、1980 年代の後半から 90 年代前半にかけて 18 歳人口が増大し、臨時定員増が認められていた時代はどの大学もわが世の春を謳歌しているように見えたが、90 年代後半以降受験者数が急速に減少し、城西大学では経営学科が特に減少幅が大きく危機感を抱いていた。2002 年大学院経営学研究科が、大島卓準備委員長の下、渡辺好章先生と木村浩先生を中核に据え、2003 年 4 月設立に向け活動を開始した時が、経営学部の出発の原点になっていると思う。当時、経済学研究科だけでは社会の要請に十分こたえられなくなったので、新たな視点で人材育成を行うという方針を掲げ、経営学研究科ビジネス・イノベーション専攻を立ち上げることになったのである。会議を毎月のように開き、水田宗子常務理事（当時）から直接指導を受け、田中昭学長（当時）と事務方の協力を得ながら、文部科学省に申請をしたわけである。提出書類の量も膨大で審査も厳しく、関係者にとっては艱難辛苦の思い出しかないだろう。

文科省の認可を得てほっとしたのも束の間、2003 年に入るとすぐ、経営学部の構想に着手することになった。いや経営学研究科開設の準備と並行して、「経営学部構想」の下準備が進んでいたと言ったほうがより正確かもしれない。しかし、原案をまとめるのには多くの困難を伴った。大学院や学部開設の際には守秘義務があり、人事を含めたカリキュラムを作成するのに水面下で動くことになる。大学の方針との整合性に配慮しつつ、時に予期しない「攪乱」に遭遇し途中で挫折しそうになりながらも、何とか耐え忍ぶ。そしてやっと申請書完成に漕ぎ着けたと思ったら、申請直前になり、最悪の事態が発生する。新学部教員予定者の中から数名の辞退者が出て、書類を書き換える必要がある。わずか数日で代替者を見つけ、その空白を埋め提出するという荒技は、たとえ「天啓」があったにせよ、二度とできることではない。まさに絶望的状况の中のミラクルであった。しかし幸いにして、新学部の名を連ねた多くの教員は進取の気象に富んだ逸材であった。その後、文科省の認可は順調に進み、秋口には「経

営学部設置準備中」の文字も外れ、入試広報も解禁となった。しかし一息つく暇もなく、最も信頼している渡辺先生と木村先生が病に倒れ、身近に人格にも識見にも優れた先達がいなくなるという状況であったが、水田宗子理事長の指導の下、経営学部棟の建設準備委員会を立ち上げた。

2004年度入試は破竹の勢いで、入学者も650名を超え、幸先良い門出となった。2005年に大学創立40周年を迎えるにあたり、病と闘っている渡辺先生の手足となり、数々の周年事業やその一環としての城西大学のCI (University Identity) 創りに奔走する。そして2005年12月に経営学部棟が竣工し経営学部の黄金時代が到来するはずであったが、その完成した姿を見ずに渡辺先生が逝去された。経営学部棟には水田先生と渡辺先生の夢が詰まっていると言っても言い過ぎではない。

表面上は、経営学部は順風満帆で快進撃を続けているように見えたかもしれないが、舞台裏は人間関係に翻弄され、チームマネジメントに苦心惨憺の有様であった。嵐の待ち受ける大海原に船出するような心境であった。経営学部開設と大学創立40周年の2年間は、ノーベル物理学賞受賞者の小柴昌俊先生をはじめとする多彩な科学者や文化人の講演会並びに、上田清司埼玉県知事や伊利仁坂戸市長（当時）をはじめとする各自治体の首長による地域と大学の連携を考えるシリーズ講演会やシンポジウムを開催し、周年事業を地域の人々を招待して実施したことはマスコミにも大きく取り上げられた。さらに韓国の東西大学や中国の大連理工大学のトップが本学を訪れ、学術交流が本格的に開始されるようになったのも2004年以降である。

経営学部ではミニマムスタンダード（基礎的資格取得目標）を設け、会計、情報、英語の3分野で実績作りに力を注いだ。特に会計分野では、簿記3級（全経または日商）合格者が年々増大し、現在では普通高校出身者だけでなく商業高校出身者も含めると1学年500名が3級以上を取得していることになる。これは日本の大学では稀有のケースであり、蛭川教授を中心とした会計担当の専任教員と非常勤講師のチームマネジメントの成果である。近年は羽瀨客員教授を迎え、税理士や公認会計士を目指す学部生や大学院生が続々と現れ、高度な資格を取得すべくしのぎを削っている。本学部生にとってTOEICが難関であるが、それでも中には800点を超える者まで現れている。留学生は900点以上を取る人が多く、中には990点満点を取る者までいて、日本人学生に良い刺激を与え、高校までの受験英語のトラウマから解放され、近年は海外へ留学する学生が着実に増加している。

故渡辺好章先生の遺志に基づき、経営学部では毎年、高度な資格を取得した者、まちづくりを実践した者、国際交流に尽力した者の中から最も優れた学生またはグループに奨学金を授与する「キャリア形成奨学奨励生（渡辺好章奨学金）制度」があるが、

表彰された彼らが社会に出て活躍する姿を渡辺先生は天上界から見守ってくださると思う。そして全学部共通で表彰される、水田宗子理事長の寄付に基づく「女性リーダー育成奨学奨励生（水田宗子奨学金）制度」とグローバル人材の育成を目指す「水田三喜男奨学奨励生制度」があるが、「世界の中の日本」という講座を履修し、日本文化の素養とコミュニケーション能力を身につけ、海外で異文化交流の機会を得て国際的リーダーになることが囑望されている。これらは、創立者による「学問による人間形成」という建学の理念や現理事長による「国際貢献や地域貢献を担う人材育成」という教育理念の体现である。また経営学部は城西大学最大の学部であることから、2012年以降第一種・第二種水田奨学生は各学年2名枠を与えられ、勉学で優秀な成績を修めた学生達の大きい励みとなっている。

国際的学术交流は、水田宗子理事長をはじめとする学校法人城西大学が積極的に推進し、現在では120を超す海外大学との協定が交わされている。近年日本人の海外留学者数が減少傾向にあるが、本学は経営学部や薬学部が国際交流に力を入れ、年々留学者数が増加していることは喜ばしい趨勢であると思う。

グローバル人材の育成が本学の基本目標であるが、経営学部のミッションはグローバルにもローカルにも活躍できるマネジメントの専門家（グローバル・マネジメント・テクノロジスト）の育成であるから、国際貢献と地域貢献をカリキュラムの骨子にしている。開設当初の3コースに、「健康スポーツマネジメント」と「グローバルマネジメント」の2コースを加え、スポーツを通じた人材育成とグローバルに活躍する人材育成にも力を入れている。そして2014年度には「観光マネジメント」を新たな履修モデルコースに加え、全6コースでキャリアパスを形成することになった。大学周辺の地域活性化プロジェクトで観光という視点から「地域ブランドづくり」に取り組むことを示唆している。2013年には海外からの年間旅行者数が1000万人を超え、東京オリンピックの開催される2020年までに2000万人を確保することが「観光立国」としての目標であることから、本学部でも「エコツーリズム」、「産業ツーリズム」、「ボランティアリズム」、「医療ツーリズム」などのテーマでまちづくりを学ぶ機会が必要だと考えている。経営学部の学生は「米国マネジメント研修」、「大連企業研修」、「ディズニーインターンシップ」、「マレーシア英語研修」、「ハンガリー文化研修」などの海外研修プログラムに参加し、異文化体験を積み、コミュニケーション能力を高めてほしいと考えている。

経営学部開設5年目以降、卒業要件を128単位から132単位に増やし、進級条件のハードルを各学年16単位、60単位、88単位に高め、それまでの専門と関連の大掴みの分類を、基本科目（28単位）、共通基礎科目（16単位）、専門教育科目（54単位）、

プロジェクト研究科目（2単位）、総合教育科目（32単位）に分類した。必修である最初の2年間のゼミの名称をフレッシュマンセミナー、ソフォモアセミナーから基礎ゼミⅠ、基礎ゼミⅡに変更し、後にゼミの目的を明確化するため、「キャリア研究含む」というサブタイトルを4年間のゼミ全てに付加した。この10年間、学部教員（専任と非常勤）並びに事務職員のおかげで、フレッシュマンキャンプをはじめとする学部独自の行事を通じて経営学部のビジネスモデルを築き上げたが、10年という節目に新たな経営学部へ脱皮する必要性が出てきたように思う。2014年度入試は、学部創設以来はじめて厳しい状況に立たされ、学内の文系学部の「競争」もさることながら、他大学の攻勢がますます激しくなっている。どの大学も生き残りをかけて、学部・学科の新增設、スポーツ制度改革、大学施設のリノベーションなどに積極的に取り組み、本学はむしろ守勢に立たされている感がある。2015年に大学創立50周年を迎える城西大学は、7つのビジョンを掲げ、教育環境を整備し、さらに飛躍することを目指しているが、経営学部が本学の屋台骨にならないと、将来展望は描けない。危機感をもってこの試練を乗り切らないと、経営学部だけでなく、大学の見通しも厳しくなると言わざるをえない。

幸い、経営学部には優れた人材が多く、2014年度に加わる予定の新たな人材を含め、マネジメント分野における研究と教育のイノベーションを起こす力は十分あると確信している。国内だけでなく海外のマーケットにおける熾烈な大学間グローバル競争の中で、アントレプレナーシップを持つマネジメントのプロフェッショナルの育成に一致団結して取り組んでほしいと願う次第である。